

いじめについての私の意見

差違の摘発

いじめは、今の学校からは到底なくならないだろうと思う。今の学校からいじめをなくそうなど、どだい無理な話だと思う。なぜかと言うと、いじめ実行のトレーニングを学校は日々子どもに積みさせているとしか考えられないからである。

いじめというのは簡単に言うと、ある子どもが他の子どもに自分(たち)とは違うところを見つけて、その差違にレッテルを貼り、その子を排除する、あるいは危害を加える、あるいは搾取するということである。その差違を見つけるトレーニングを学校は積みすぎていて、これは小学校に入学した直後から(あるいはそれ以前からのこともあろう)ずっと行はれていることである。差違を見つけてはそれを切り捨てる。そういうトレーニングを子どもは毎日毎日やらされている。正解というものは一つしかなく、その正解と少しでも違えば、それは間違いであるとして捨てさせられる。そういう練習を毎日積んで来ている。当然、差違に非常に敏感になる。違いの分かる男と違いの分かる女の大量生産が日々行はれているのである。

典型的な例は、漢字の書き順である。漢字には正しい書き順が一つだけあって、その書き順が少しでも違えば、それは間違いだという烙印を押される。社会に出れば、学校では間違いとされた書き順で漢字を書いても、誰も問題にはしない。そうなのに、なぜか小学校では、唯一とされる正しい書き順で書くことをたたき込まれるのである。

漢字に関してもうひとつ例を挙げると、これは私の子どもが小学校三年生の時だったと思うが、たまたま漢字テストの解答用紙がテーブルの上に置いてあった。問題のひとつは、「きく」の漢字を問うものであった。解答欄には門がまえの中に耳が書かれていて、それには赤ペンでXがついていた。私はしばし見つめて、「あ、これは正しい字に書き直してあるのだな」と思った。ところが、それは書き直された字ではなかった。その字が間違いだったのである。私も日頃それと同じ字を書いているので、正解が分からず、わが子に聞いてみると、門がまえの中は「耳」ではないと言うのである。辞書を引いてみると、確かに子どもの言うとおりであった。聞くのは耳で聞くのだから、門がまえの中はてっきり「耳」だと思い込んでいて、私は今までずっとそのように書いてきた。ところが、「耳」の一番下の横線は、縦線から突き出ないのが正解なのであった。(注:ところが、その後知ったのだが、HG 正楷書体-PROのフォントにすると「聞」となるのである)

他にも漢字に関しては、どこをはねないといけないとか、どこをはねてはいけないなど、正解との違いを意識させる訓練が非常に多い。

「学問のすゝめ」を読む

差違の摘発のことでもうひとつ思い出すことがある。私自身の高校時代のことである。日本史のテストで、福沢諭吉の代表的な著作を書けという問題が出た。私は、「学問のすゝめ」と書いたのだが、減点されたのである。正解は、「学問のすゝめ」なのだそう。岩波文庫を手にとってみると、確かに「学問のすゝめ」となっている。しかし最初に出版されたときは、カタカナ書きで「學問ノスゝメ」とな

っていたのではなからうか。たとえ初版から平仮名であったとしても、漢字は旧漢字であったはずだから、うるさく言うのなら「学問のすゝめ」を正解とすべきではないか、と今でも思い出すと不愉快になる。

そんなことばかりうるさく言われるから、肝心の中身に対する興味は失われて、「学問のすゝめ」を当時は全然読む気にはならなかった。初めて読んだのは32歳の時である。曰く因縁のある「学問のすゝめ」を、高校を出て十四年経って初めて読み、再び不愉快な思いをさせられることになった。

この本の冒頭の一文は、あまりにも有名である。私は、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」だと思い込んでいた。しかしこの有名な書き出しの一文は、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」で終はっていない。「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり」で終はっている。つまり、『天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず』と云はれている」といふことなのである。つまり『天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず』といふこと自体は、福沢諭吉のオリジナルな思想ではない。これはアメリカ独立宣言やフランス人権宣言の思想を要約した表現なのだそうだ。

実は「と云へり」が曲者なのである。この言葉は、当然この文の次に福沢諭吉の言いたいことが続くことを示唆するものである。この後にどういうことが書かれているかと言うと、おおよそ次のようなことが書かれている。『天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず』と言われているけれども、現実の世の中を見渡したら、身分の上下や貧富の差には雲泥の差がある。その差はどこから来ているかと言うと、学ぶか学ばないかの違いである。そこで福沢先生は、「勉強しなさい」とのたまうわけである。これでは「学問による差別再生産のすゝめ」でしかないではないか。

「学問のすゝめ」は、1872年に初版が出版されたのだが、当時爆発的なベストセラーとなった。この書はわが国の学校教育の普及に大いに貢献したと思われる。今でもわが国の学校教育の大きな原動力になっているのではないかと思う。とにかく学校へ行くことが、「学問のすゝめ」の中では至上命令になっており、学校で教育を受けることが、日本人の道德感の基礎となっていく上で、この書は大きな役割を果たしたと言える。

習慣となった差違の摘発

実は差違を意識することは、それ自体悪いことではない。ボーヴォワールは、「第二の性」の中で次のように書いている。「主体は対立することによって自己を立てる。自己を本質的とし、他者を非本質的なもの、客体とみなすことによっておのれを確立して行こうとするものだ」と(新潮文庫「第二の性」IV, 14頁)。エリクソンの言うように、思春期青年期の発達課題を、自己同一性の確立を目指すことと考えれば、他者との対立、自他の差違の意識化を通して、子どもは自己同一性を確立していくと言えよう。

そういう意味では、差違を意識するトレーニング自体は決して悪いことではない。しかし、今の学校教育は、あまりに差異の意識化と負のラベル付与に偏って精力を注ぎすぎていわしないか。違いに見えていたことも、見方を変えれば同じものに見えるとか、物事にはいろんな見方があるという

ようなことをあまり教わらず、ひたすら差違を見つけ、少しでも正解と違うものは捨てさせられる。そういう差違の摘発練習を子どもたちに積み重ねすぎている。そのために子どもは、人と人との違いについて負のイメージを抱き、それを排除することがごくごく自然にできるようになってしまう。これでは到底いじめはなくなるまいだろう。

我が国の学校教育に欠けているのは、ロジャー・フォン・イークの言う「やわらかい思考」のトレーニングだと思う。イークは、その著「頭にガツンと一撃」(城山三郎訳、新潮文庫)の中で、「かたい思考」と「やわらかい思考」とを対比させ、後者の重要性を説いている(この本はなかなか示唆に富んでおり、是非一読をお勧めしたい)。一箇所だけ引用しよう。

やわらかい思考は、物事の類似性と関連性を見出そうとするが、かたい思考のほうは、その相違に注意を集中する。たとえば、やわらかい思考をする人は、ネコと冷蔵庫には多くの共通性があると言って、その類似点を数えあげるかもしれない(「どちらにも魚を入れる場所がある」「どちらにもしっぽがある」「どちらにもいろいろな色がある」など)。かたい思考をする人は、ネコと冷蔵庫は二つの異なった領域のものだときめてかかるであろう。

おわりに

不登校やいじめに対して根本的な解決を目指すためには、明治以来の学校教育の形式と内容を根底から検討しなおす必要がある。その際、我が国の義務教育現場で古くから前提となっている「常識」をまず打破しておかねばならないだろう。そのひとつの例として、とりあえずここでは、「違ひは切り捨てろ」という学校常識を取り上げてみた。

ホームページ『児童精神科医 門真一郎の落書き帳』より(1999)